慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治社会主義史料にあらわれた外国社会主義運動：「直言」を通じてみた
Sub Title	The international socialist movement and socialist papers of the Meiji era
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.6 (1961. 6) ,p.475(39)- 481(45)
JaLC DOI	10.14991/001.19610601-0039
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610601-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

をもつはずである」（同上、二四四～五頁）と。

（7） Любошиц, Л. И.: там же, стр. 205.

（8） Там же, стр. 210.

（9） Там же, стр. 210.

（10） Там же, стр. 208.

（11） Там же, стр. 209.

（12） この「万能」型トラクターは、これまでのトラクターの遂行しえた一切の機能を備えているほか、畦間の中耕除草にも使用しうるように十分な地上間隙（クリアランス）が設けられ、操縦が簡単で、駆動輪は各種の条作物の要求に従って轍間距離を調節できるように車軸の上で左右に動かすようにできており、一九二二年に初めて現われた動力着脱装置と定置作業用ベルト車装置とが備わっている。このようなさまざまな機能の結合に成功した結果、この「万能型」トラクターは従来の型のトラクターが処理しえなかった作業用として急激に人気をかちえたのである（ハロルド・バーガー、H・H・ランズバーグ『アメリカ農業の成長分析』【馬場啓之助監修・山口辰六郎訳】一七八頁参照）。

（13） ハロルド・バーガー、H・H・ランズバーグ、同上書、一七八頁。

（14） 同上、一八二頁参照。

（15） App, F.: The Industrialization of Agriculture, "The Annals of the American Academy of Political and Social Science," March 1929, p. 228.

（16） Любошиц, Л. И.: там же, стр. 244.

（17） Там же, стр. 242.

（18） Там же, стр. 242. см. там же, стр. 217.

（19） Там же, стр. 243.

（20） 拙稿、前掲論文、一一七～一二二頁。

資料

明治社会主義史料にあらわれた外国社会主義運動

――「直言」を通じてみた――

飯田鼎

一

最近、明治期を中心とする社会主義運動の研究が非常に盛んであり、とくに個人では到底入手しえなかった貴重な文献や史料の復刻が着々と進められていることは、労働運動史や社会主義運動史の研究に志す者にとってまことに喜ばしい。すでに岸本英太郎教授等を中心とする「資料日本社会運動思想史刊行会」によって、明治、大正および昭和にわたる厖大な資料集の編纂が企てられ、文庫版でかなり多くのものが刊行されていることは周知のところであるが、その後、週刊「平民新聞」や最近では労働運動史料刊行委員会によって、全十一巻にわたる大部の史料集の刊行が企図され、すでにその第十巻が出されており、またこれとは別に、片山派の機関紙として、日本労働組合運動に画期的な貢献をなした「労働世界」の復刻もあらわれている。こうした史料集の刊行のなかで、今回、明治文献資料刊行会によって、労働運動史研究会編纂の明治社会主義史料集全八集の刊行が企図された意義は大きい。ここに紹介を試みようとする「直言」は、塩田庄兵衛氏の解説が附せられており その第一集である。そして明治三〇年以後における地方社会主義新聞として異色ある「牟婁新報」抄録が、和歌山大学の関山直太郎教授によって編纂されたのを機会に、この両者が、明治社会主義史料としては、いわば姉妹関係にあるところから、同時に読んだのであるが、それよりも筆者がこの二つの史料を読んで深く感銘させられたことは、この両者とくに「直言」にあらわれた日本の社会主義者の外国社会主義運動、ロシア、ドイツ、アメリカなどにおける革命的な事件や労働者階級の運動にたいする熱烈な関心である。この史料がもつ歴史的な意義についてつぎにより具体的に考察することにしよう。

二

日本の社会主義運動の歴史を顧みるとき、明治三〇年代は、いくつかの理由でたしかに忘れることのできない一時期を画している。ま

ず第一にそれは、日本の産業資本の確立期に当り、世界的な状勢としては、資本主義は帝国主義段階に突入した時期である。第二に高野房太郎や片山潜等によって本格的な労働組合の組織づくりの基礎がきずかれた時期である。そして第三に、治安警察法の公布によって、労働組合運動は、頓挫を来すとともに、急進的な無政府主義運動が労働組合運動とはあまり関係がなく、従ってまた広汎な大衆的基盤なくして開花した時期であるが、同時に、平民社に拠る一握りの社会主義者の反戦平和運動が熾烈に展開され、内外に大きな反響をまきおこした時期に相当する。

高野房太郎の悲劇的な生涯に象徴的にみられるような労働組合運動の治安維持法以後における衰勢は、平民社を中心とする社会主義運動をますます孤立させ、この両者の不均等な発展に拍車をかけ、ついに大逆事件となって明治社会運動史の幕は閉じられるわけであるが、われわれが、明治三〇年以後、大逆事件までの労働運動・社会主義運動の歴史をみるとき、その指導者層がもってその範とし、その行く手を照らす「道しるべ」としたのは、アメリカの労働組合運動であり、ロシアの革命運動であり、はたまたドイツ社会民主党を中心とする第二インターナショナルの運動であった。明治社会主義運動史の研究は従って、日本の労働運動が、外国労働運動からいかなる影響をうけたか、その指導者はそれから何を教訓として汲みとり、思想と行動の指針とするに至ったか、その関係をも当然課題とすべきであり、日本における社会主義思想の形成史における重要な問題、たとえば、堺利彦や森近運平の思想に対するマルクス主義の影響、幸徳秋水を中心とする無政府主義と西川・片山らのいわゆる硬軟両派の思想的対立の背景などを理解するためにも、この時代の社会主義者が、外国の社会主義運動をどのようにうけとり、どのように理解したかを知る必要があろう。

この意味で「直言」は、日露戦争中に勇敢に反戦平和運動を唱えた週刊「平民新聞」が、きびしい弾圧と極度の財政難の結果、廃刊を余儀なくされた明治三八年一月、その後継紙として、月刊「直言」を更めて週刊「直言」が発行されたのであった。ときあたかも、一九〇五年の第一次ロシア革命が勃発し、ロシアにはブルジョア民主主義革命の波が怒濤のようにおしよせ、わが国の社会主義運動の指導者にも深甚な影響をあたえていた。直言が発刊された明治三八年一月当時は、まだ日露戦争酣なるときであり、軍国主義と愛国主義が滔々として、世論をまきこみながら、やがて戦争の終結にともなう不景気の到来、戦勝の夢と現実との背離に絶望した大衆の憤激が、次第に予測されつつあり、戦争の国民生活にたいする負担が耐え難いまでに増大した時期である。そしてこの「直言」が発行不可能となったのは、三八年九月、アメリカのポーツマスにおける日露講和条約の結果を不満とする民衆の焼打ちによる発行停止の結果であった。この約九ヵ月の間、「直言」は、三二号を発行したのであって、解説者塩田氏が、「解説」において適切にのべているように、『「直言」を特色づけているのは、第一次ロシア革命にたいする強烈な関心であり、また注目をひくものに、第二九号から三二号にわたった『社会主義と愛国心』についての外国の論文の紹介がある。」

しかし何よりもこの「直言」が日本社会主義運動史上に特筆されるべきは、反戦平和のスローガンを掲げて平民社に結集した進歩的なインテリゲンチャの代表ともいうべき人々が未だそのイデオロギー的分解を示さなかったにしても、幸徳秋水、西川光次郎の入獄によって打撃をうけ、やがて政府による苛酷な弾圧、幸徳の渡米そしてその後に来るイデオロギー的抗争のなかで、次第に分裂的様相を深めてゆく時期、すなわち焼打事件、直接行動論の擡頭、硬軟両派の闘争、赤旗事件、そしてついに大逆事件に至るかのいたましい敗北への途が開かれようとする前のイデオロギー的未分化の最後の段階における社会主義者たちの死闘を物語っているからである。

三

「直言」は、八面からなる週刊紙で、第一面は社説および英文欄から成り、第二面および三面は、「内外時事」と称し、内外の重要な事件を掲げてニュース風に解説し、第四面および五面は堺利彦、木下尚江、石川三四郎などの社会主義者の自由な評論、論文をもってうずめられ、第六面は、社会主義にかんする名著の翻訳紹介もしくは、主として当時の大学教授などの説を諷刺するのにあてられ、第七面は、「同志の運動」と題して東京および各地の研究会の現状や、いわゆる伝道行商の模様について記されている。そして最後の第八面は広告というまことに充実した内容と体裁をとっている。

ここでもっとも注目すべきは、「内外時事」にあらわれた一九〇五年の第一次ロシア革命にかんするニュースであろう。二月五日の「内外時事」にのせられた順に、記事の見出しをぬき出してみるならば、「露国革命の火」と題して、△ガポン長老の檄、△弁護士の決議、△名士捕縛、△コサック兵と職工、△死傷多大、△職工の鉄道攻撃、△ゴルキーの拘留などで、そのほか、ポーランドの大騒乱、モスコー、キエフおよびワルソーなどの大都市における革命的な状勢が伝えられている。また二月一二日号には、△露帝と職工総代、△ウィッテの改革案、△露国貴族の活動、△擾乱猶罷まず、△飛火などが掲げられ、最後に、「日本横須賀における船渠（ドック）会社の同盟罷工は、必ずしも露国革命の飛火にはあらざるべしと雖も、革命の気運が欧洲の天地に漲れることは実に疑うべからざるものあり」とのべられているのは、ロシア革命を、日本の運動と結びつけようとする意図もみられ、興味深い。

しかし当時の社会主義者が、第一次ロシア革命をどのように評価していたかという点になると、二月一九日号の社説「露国革命が与ふる教訓」を見逃すことはできない。この論文は、無署名であるために、誰の筆になるものであるかは明らかではないが、全体は四節にわかれ、大体において、デカブリスト以来のロシア急進主義及び社会主義運動の歴史の要約であって、注目すべきことは、ナロードニキの運動を重視し、当然のことながら、その革命的性格のみを評価

して、そのなかに潜む反動性を看破することはできなかったし、むしろ、ソフィア・ペロブスカヤ女史やヴェーラ・ザスリッチなどのテロリスト的な行動を英雄視したことは、当時の社会主義運動の思想が、まだ未分化の状態にあったにせよ、ロシア無政府主義の影響を色こくうけていたことを物語っている。われわれはむしろ、明治期における社会主義運動において、すでに幸徳がその直接行動論を唱えることによって、深甚な衝撃を与える以前に、ロシア無政府主義の潮流が、かなりの影響力をもっていたことを認識するのみでなく、一九〇五年の革命を、ブルジョア革命としてではなく、無政府主義的な視角からしか把握できなかったその理論的な未熟さをも見逃してはならない。

とはいえ、当時の日本に流入し紹介された社会主義思想は、ひとりロシア無政府主義のみではなかった。注意深く読んだ者ならば二月二二日号には、イギリス労働党のイデオロギーの形成に貢献したロバート・ブラッチフォード（Robert Blatchford）の名著「メリー・イングランド」（Merrie England）の、枯川堺利彦による抄訳が、五月二一日号まで十三回にわたって連載されているのを発見するであろう。

幸徳秋水とともに、日本における「共産党宣言」の最初の訳者という先駆的役割を果した堺は、その後も海外名著の紹介を怠らず、六月四日号および一一日号には、「マルクスの学説」と題し、当時、ウィスコンシン大学の教授であったイリー（Richard T. Ely）の

「独・仏における近世社会主義」を訳載し、つづいて、一九世紀末期のイギリスにマルクス主義を普及せしめるのに貢献したH・M・ハインドマンの「社会主義の経済論」を六月一八日から七月一六日までに六回にわたって掲載していることは、のちに彼が日本における最初のマルクス主義者のひとりになったことを考えると、甚だ興味深い。

再びロシア革命についてみると、二月二六日の「内外時事」に、「露国平民の勝利」と題して、つぎのような記事がのせられている。

「露国の革命運動は一時政府の武力のため下火になりたるやの観ありしも、そは只表面の現象にして、裏面の運動は、爾来愈々盛んなるものあり、セルジ大公と称する現皇帝の伯父を暗殺するに至って、彼等の気勢は最も高まり来れり、而して皇帝も終に多数平民の威力に屈し、国会を開設するに決せり……。吾人は露国平民が終に民主政の第一歩を購ひ得たるを祝せざるを得ず、而して之を得んが為に彼等の注ぎたる血と命との多大なるを見て、深く彼らの勇気に服せざるを得ず。」

周知のように、第一次ロシア革命は、一九〇五年の一月九日、いわゆる「血の日曜日」に至って、燃え上ったのであった。十四万以上にのぼる労働者による教会旗、聖像、ツァーの肖像を捧げた平和的な行進にたいして、ツァーの軍隊は攻撃を加え、千人以上の労働者およびその家族が殺され、約五千人以上が傷ついたといわれるが、この事件に際して僧侶ガポンの果した役割は、挑発を目的として、ツァーに請願書を手渡すために、冬宮へ労働者の行進を行うように提案したものであることは、すでに今日常識となっているし、ガポン僧正がツァーの秘密政治警察と何らかの連絡をとったものであることは、今日歴史的な事実として明らかにされている。このガポンの役割について、「長老ガポンの人物」と題し、この事件の指導的人物としての彼のプロフィールを描いているが、もちろんその本質を穿っているものではない。その後もロシア革命にかんする報道はつづけられている。たとえば三月五日号には、「世界の新聞」の欄に「露国革命彙報」と題し、ペテルブルグにおける惨劇の模様を詳細に報じている。そして更に三月二〇日号には、「露国革命の淵源」という論説がのせられている。これはすでにみた二月一九日号の「露国革命が与ふる教訓」とちがって、帝制ロシアの歴史的形成過程を論じたもので、より分析的なものであるとしても、必ずしも程度の高いものではない。

われわれの注目をひくいまひとつの論説は三月一九日号にのせられた「俘虜諸君に告ぐ」という、囚えられて日本の各地に収容されていたロシア兵にたいする「直言」の訴えである。それはまず捕えられて敵国に俘虜の運命に陥った兵士に同情し、ロシアの専制政治と日本の似而非立憲主義とを比較する。そして、日本の立憲主義の真に学ぶに値しないことを力説したのち、むしろロシアこそ革命の発祥地であり、ロシアにおける革命の狼火は、アジア諸国にも深甚な影響をあたえるものであることを主張してつぎのようにのべている。

「記憶せよ、諸君、二〇世紀初年のロシアは猶ほ十九世紀初年の仏蘭西の如き也、西欧諸国の革命が、常に仏蘭西の合図を待ちし如く、今や東洋の諸亡国は、露国革命の信号をみて復活せんと待ち構えつつある也。支那を看よ、朝鮮をみよ、吾人豈に諸君の発憤を禱らざるを得んや。」

ここには、ロシア革命にたいする深い共感をみることができるであろう。

すでに指摘したように、「直言」は、第一次ロシア革命にたいする異常な関心と、さらに帝国主義戦争としての日露戦争の最中に発行されたため、「社会主義と愛国心」の問題について、読者の注意を喚起するために、当時、イギリスの社会民主連盟の指導者であったケルチ、ドイツ社会民主党のアウグスト・ベーベル、イタリア社会党の領袖エンリコ・フェリ、フランス社会党のギュスタヴ・エルベ等の論文をそれぞれ二九号から三二号までにかかげている。

ケルチの論文を読むに、その云わんとする所は、階級闘争は、他のあらゆる闘争にもまして労働者階級にとっては必要であるから、フランスおよびドイツのような国の労働者階級が政権を握り、その軍隊が英国に侵入して革命運動を助けるのであれば、これに抵抗してはならないが、しかし国家の自由独立のため、及び民権救護のためには社会主義者もまた国防軍を助ける義務があるとして微妙な論法を展開している。すなわち、「印度の土人が英国の帝国主義的資本家の桎梏より脱せんことは、吾人の衷心より喜悦する処なり、さ

ればとて露国の侵入に対してこれに抵抗せざるが吾人の義務なりと云ふべからず……」（第二九号、八月二〇日、傍点筆者）という主張にみられるように、当時の第二インターナショナルにつらなる指導者たちは、国際主義と国民主義との板挟みにあっていたのであって、その事情は、ひとりケルチのみならず、ベーベルにおいても同様であった。「然れども若し、社会党の意志に反して戦争の爆発したる時は、社会党は厳烈なる抗拒をもって、之が原因を考究せざる可からず。若し自国政府が侵入者ならば、戦争をなすべき総ての方法を峻拒し、而してその全力を尽して戦争と戦はざる可らず、又若し自国政府は他の侵入を受け、その意志に反して戦うの已むを得ざるに至りたるものならば、社会党と雖も政府との共力を拒む事を得ざる可し、何となれば、戦争の為め、最少の苦痛を感ずるものは政府にして最大の苦痛を感ずる者は国民なればなり」（第三〇号、八月二七日、傍点筆者）。

これらの論調にすでにあらわれているプロレタリア国際主義の部分的な修正は、実は一九〇〇年の第二インターナショナルパリ大会に発し、一九〇四年アムステルダムにおいて開かれた第二インターナショナル第六回大会において頂点に達したベルンシュタインの修正主義の波紋を忠実に反映するものであったことはいうまでもない。だとすれば、わが「直言」によった社会主義者たちは、この愛国心の問題をどのように考えていたであろうか。

三月一九日号に、石川三四郎の「社会主義者の愛国心」という小論文がみられるが、石川はそのなかで、「社会主義者は、『国家』を愛することができますまいか、私は此事を考へる前に先づ社会主義者は『人』を愛することが出来ぬ者であるかと言ふことを定めたいと思ひます」と前置きし、さらに「然らば国家を愛することが出来ませうか。若し『人を愛することが直ちに『国』を愛することになりますなら、社会主義者は『国』を愛せずには居れません、之に反して若し『国』を愛することが『人を害するに至るならば、社会主義者は『国を棄てゝ『人』の為に尽さねばなりません、即ちドコ迄も人道の宣揚者、人道の保護者、人道の選士をもって自任せねばなりません』とのべている。ここには、社会主義者として帝国主義戦争に反対し戦争の本質に肉迫するというようなはげしいものは見られないにしても、ヒューマニズムの立場から、国家権力による暴力的非人道的行為にたいする否定がにじみでている。むしろ愛国主義・軍国主義にたいする抗議は、六月四日号の論説「大軍備の児戯」において、一層明白に主張されている。そのなかでつぎのように軍備拡張の意義を暴露しているのは注目に値する。

「バルチック艦隊の全滅を聴いて、日本国民は欲喜措く所を知らず、此の壮挙以て日本の英名を世界史上に不朽ならしむるに足ると称す、吾人は其の果して然るや否やを研究するの必要なし、然れども其の万民が等しく学び得たる大教訓は、即ち是れ也、『軍備必竟児戯に外ならず』……

諸君は露国に於て当然来るべき軍備拡張の亡国的児戯を、日本に於ても演出せしむることを容すや否やと、吾人は日本に侵略主義の政治家あることを暫く信ずる無かるべし、然れども其の侵略主義の学者と論客と実業家と号する山師の存在することは、諸軍の承認せざるべからざる所なれば也……。若し夫れ山師の徒に至っては其の必生の目的は『国家の光栄』の記号の下に同胞の幸福を犠牲として自家の懐中を肥やすに在り……。」

戦争によって利益を得る資本家、愛国主義・軍国主義の美名において軍備拡張を唱える学者を「山師」と痛罵しているのは面白い。そして最後につぎのようにいう。

「日本国民よ、諸君は平和を愛することを以って光栄となすに非ずや、侵掠を好むものに非ざることを弁疎することに於て汲汲として曾て怠らざるに非ずや、吾人は此点に於て諸君に信頼せんことを欲す、然れども千万言遂に一行に如かず、若し諸君にして露国の専制家が当に計画すべく日本の山師がまさに切望すべきが如く、戦後の第一事業として、軍備の回復及び拡張を賛助するが如きことあらば、今日までの弁疎と苦心と又た何の効果あらんや、吾人は明言す、政治の目的は「利己」に非ず」と。

すでに指摘したように、「直言」は、平民新聞の悲壮な廃刊の後、これに代って発足したものであるが、しかしその論調は、平民新聞ほど格調の高い絢爛たるものではなく、政府の政策を批判するにあたっても、非常に慎重に筆をはこんでいることがわかる。これはひとつには、幸徳が西川とともに投獄されて、例の悲憤慷慨の美文に接することができなかったためでもあるが、また弾圧による廃刊をさけるための戦術的な意味もあったようにも思われる。しかし「直言」を読んでもっとも印象づけられることは、やはり労働者の新聞ではなく、知識階級の新聞であったことであろう。なるほど「同志の運動」と称して社会主義研究会、社会主義演説会、各地における社会クラブの模様などは、その都度掲載されているけれども、あるいは時折、労働者談話会なども開かれたようであるけれども、労働者を組織し、組合を結成しようとするような動きがまったくみられないことである。これは片山潜の「労働世界」による運動と考え合わせると興味深いのであるが、要するに「直言」の使命は、海外の社会主義運動や革命の報道を中心とする啓蒙であって、しかも彼らはその対象として工場労働者を中心とする近代的なプロレタリアートに接近しなかったし、また積極的にこれを把握しようとしていなかったようである。少数の社会主義者が、日本の各地に伝道行商に旅立った記事を読めば、その求道的な情熱にうたれない者はないであろうが、社会主義革命の担い手について、理論的に考えていなかったことは事実であり、当時の運動の致命的な欠陥がそこにあったことは認められねばならない。だが、「光」と「新紀元」とに分裂する直前まで、「直言」の、唯一の社会主義新聞として果した役割には、平民新聞と同様、高い評価があたえられるとともに、イデオロギー的未分化の最後の時期における社会主義運動の理論的水準を忠実に反映しているということができるであろう。